| | |
|---|---|
| Title | キリスト教現実主義と新しい現実 |
| Author(s) | Robin, W.Lovin<br>森田，美千代・訳斎藤，薫・訳 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No.57 別冊,2014.3：115-131 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5104 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# キリスト教現実主義と新しい現実

ロビン・W・ラヴィン
森田美千代・斎藤 薫 訳

第二次世界大戦後のグローバルな秩序の再構築は、おそらく二〇世紀における最も重要な政治的達成であった。ほんの数年の間に、新しい国際機関が創設され、国際貿易のルートが新しく作られたり、再生されたりした。同盟関係は急速に変化していった。かつての同盟国が敵となったり、かつての敵国が同盟を結んだりして、世界は、われわれが「冷戦」と呼ぶ緊張に満ちたかたちの国際関係に適応していった。なかでも、最も重要なのは、世界共同体が、戦争に対する刺激剤ではなく抑止力として役立つような仕方で、増え続ける保有核兵器を管理することを学んだことである。その成果は現代まで持続している。とはいえ、その成果は、冷戦の間、つねにいつ崩壊するかわからない危険にさらされていたし、その状況は今日も変わらない。

政治学者や政策立案者たちは、西側列強がこの新しいグローバルな秩序を構築するのに貢献したが、かれらを導いたのは「現実主義」という哲学であった。これらの現実主義者たちは、第一次世界大戦後にヴェルサイユ体制の平和と国際連盟を作り上げた理想主義者たちとは対照的に、主権国家が必要とする安全保障を核にして形成された国際関係の基本構造が大きく変わることは期待していなかった。かれらは、どんな力も、安全保障のすべての目標を達成すること

を期待することはできないと認識していた。また、往々にしてより積極的に自分たちの力の限界を試したがる政治や軍の指導者に対して、抑制の効いた限定された目的を持つよう勧告した。なによりも、国家がどのように行動するかを理解し、将来どのような行動をとるかを予測する方法は、各国の自己利益を理解することであると主張した。現実主義者は、自己利益こそ人間の行動を導く基準であると見る。それは、個人においても国家おいても変わりはない。われわれが、自身にとって何が益であるか、また、敵にとって何が益であるかを考慮の中心に据えるならば、敵が何をしようとするのかを理解できるし、われわれ自身の力や徳を過大評価することも避けられると、現実主義者は言う。

## ラインホールド・ニーバーのキリスト教現実主義

アメリカ合衆国では、当時の世界政治の新しい現実に対する、この現実主義的な取り組みを形成する上で、神学者のラインホールド・ニーバーが重要な役割を果たした。このことは、おそらく、歴史の当初から道徳的にも政治的にもキリスト教が強い影響力を持ってきたアメリカ合衆国にあっても、神学者にとっては驚くべき役割であった。もっと驚くべきは、この役割が、一九三〇年代のアメリカ社会を鋭く批判していたラインホールド・ニーバーに委ねられたことである。ニーバーの最初の重要な著書である『道徳的人間と非道徳的社会』は、回心と説得によって社会を変えようとするキリスト教の試みを否定した。同書は、その最後の数頁で、白人アメリカ人は、人種によって徹底的に分割された社会における優位な立場を、無理やりそうさせられない限り決して放棄しないだろうと警告している。ニーバーは、社会と社会の問題に対する自身の取り組みの仕方を「キリスト教現実主義」と呼んだが、当初、同時代の多くの人々には、それはあまりにも現実主義的で、キリスト教と呼ぶにはふさわしくないと思われた。

しかしながら、それ以上に多くの人々が、一九五〇年代の前半までに、ニーバーの現実主義の要点を理解できるようになった。ニーバー自身、人間の可能性に対して厳しく評価すると同時に、キリスト教的希望の要素も明確にした。キリスト教現実主義の成熟したかたちは、自己利益についての単なる政治理論ではない。それは、人間が、隣人に不利益を与えてまで自己の利益を追求するという罪深い生き物であると同時に、神の似姿に創造され、自己利益を超越して他者のために行動することができる存在でもあるという、聖書的な考えに基づいた人間本性の理解である。これら二つの考え方は、表面上矛盾しているが、どちらも、聖書の証言とわれわれの経験の中に見られるものである。間違いは、それら二つを分け、人間の経験か聖書の証言のどちらか一方を取り上げて、人間の本性を、そのどちらかを中心にして説明し尽くそうとすることである。ニーバーが、最初、自己の欲望を追求する人間の罪深い性質の面を強調したとすれば、それは、かれが、アメリカのクリスチャンや政治指導者が、社会正義および世界平和に対する道徳的可能性についてあまりにも楽観的に過ぎる、と確信していたからである。しかし十年にわたる経済危機と戦争によって、同時代の多くの人々がもう良いことなど望めないと確信するようになった時、ニーバーは、かえってそうした道徳的可能性に固執したのだった。

ニーバーが一九四〇年代および五〇年代に理解していたように、現実主義は、人間の本性や人間が作った制度について、まったくの楽観主義でもなければ、まったくの悲観主義でもない。現実主義は、われわれの共同体やわれわれが作った機関のために何ができるかについて、正確でバランスのとれた理解に到達するために人間の本性のすべての面を真剣に受け止めようとする。ニーバーが『光の子と闇の子』で書いているように、「人間の正義を行う能力が民主主義を可能とし、人間の不正義への傾向が民主主義を必要とする」のである。キリスト教現実主義の目指すところは、人間の可能性を最大限に引き出し、人間の悪に制限を課す法律や制度や社会の取り決めの類を明確にすることである。冷戦時代におけるニーバーの貢献にとってきわめて重要だったのは、民主的な制度は、そうした人間の可能性を伸ばすため

のものにせよ、権力側にいる人間がともすれば陥りやすい不正を抑えるためのものにせよ、歴史的な経験を基礎として築かれてきたということを、ニーバーが信じていたことである。

すべての人が、ニーバーの思想を形作っている創造と堕落、罪、神の似姿などについての神学的概念を理解できたわけではない。しかし、哲学者や社会科学者たちは、人間本性に対するその洞察と、冷戦におけるアメリカとソ連の対立と核戦争の脅威によって強いられた限界の中でグローバルな秩序を形成しようとする挑戦にとって、西欧の政治的思想の歴史が重要な意味を持つと解釈するその能力のゆえに、ニーバーを賞賛した。極端な現実主義者たちが、超大国同士の相反する利害のゆえに戦争は避けられないと公言した時、ニーバーは、人間には新たな可能性を心に描く能力があるのだと主張した。理想主義者たちが、人間の将来を、国際連盟のような、まだどんなものになるかもわからない不完全な機関に任せたがった時、ニーバーは、階段を注意深く一歩ずつ上がることによって、平和を確立していくことの必要性を説いた。何よりも、強国が、己の限界を自覚し、自分たちができないことと知らないこととを知るべきだと強調した。ニーバーが、グローバルな秩序について自らの思想を発展させた冷戦状況が去って久しい今日の政治において、新たに注目を集めているのは、ニーバーの思想のその側面なのである。冷戦が終結し、アメリカが世界唯一の超大国として残った時、アメリカの指導者の中には、これで抑止力の必要性もなくなり、民主主義の世界的な将来は確約されたと結論づける者もいた。少なくともアメリカの利害に関する限り自己利益が優先され、アメリカは、多かれ少なかれ、グローバルな政治の領域において自分の望むことをすることができるようになった。二〇〇一年のテロリストによる攻撃も、この楽観的な見方に疑問を挟むことにはならなかった。なぜなら、それは、アメリカが合法的に自身の力をそのような脅威の元になっている地域に向けてぶつけ、それらの国の政権をアメリカの利益により好意的で民主的な指導部と入れ替えることが可能になったことを意味するからである。しかしながら、それ以来、アフガニスタンにおける長期にわたる戦争と、イラクにおける和平工作の痛みを伴う遅れは、ラインホールド・ニーバーが、最初からわれわれに言い

続けてきたことを明らかにした。つまり、われわれの力にはつねに限界がある。なぜなら、われわれはつねに自分たちの利害は全世界に共通だと主張しているが、それは違うし、われわれが軍事行動を自分たちの知識は完璧と思って始めるが、それも違うからである。これらの洞察は、人間本性を聖書的に理解する者には何ら驚くべきものではないが、政治のことだけに考えがとらわれてしまうとつい忘れがちになってしまうのである。

## 新しい現実

その結果、われわれは、次のようなことを学びつつある。すなわち、ラインホールド・ニーバーが主張するような現実主義から引き出された洞察には永続的な妥当性があるが、今日の世界が多くの点で、ニーバーや二〇世紀中葉にニーバーの著作に従った人々には認識できないものとなっていることも確かである、ということである。かれらは、アメリカと中国が北朝鮮の野望を抑制するために協力するかもしれない状況を想像することはできなかったであろう。また、核の脅威が、ワシントンやモスクワで管理されている巨大な兵器工場からではなく、ほとんど兵器をもたない弱小国から、とりわけ、その核兵器への接近がおよそいかなる政府の管理下にもないような無名の人々からもたらされるような世界を、どう解釈してよいのかわからないであろう。さらに、われわれにより大きな現実を気づかせる小さな変化がある。たとえば、上海やモスクワにおける証券取引所、欧州議会、スコットランド議会、ニュージャージーのプリンストンにおけるロシア人所有のガソリンスタンド、モスクワのクレムリンを見渡せるアメリカのピザ・レストランなどである。

もしキリスト教現実主義を構成しているものが、ラインホールド・ニーバーやその仲間が一九四〇年代や一九五〇年

代の諸問題について持った洞察以上のものでないとしたら、キリスト教現実主義は、今日のわれわれにとって歴史的関心をそそるものにしかすぎないであろう。われわれが、明確にニーバー的で、しかも今日のグローバルな現実に対して明白に妥当性のある諸原理を確認することができるのは、ニーバーの現実主義が、人間本性と、人間本性と政治のつながりについてのこの長い思索の歴史に結びついているからである。

すぐに頭に浮かぶひとつの原理は、ニーバーの次のような警告である。「過度の自己愛という腐敗がまったくないような、人間の道徳的あるいは社会的達成の段階はない」[1]。ニーバーの主張によれば、この原理は誰にでも当てはまる。この原理をわれわれに気づかせるキリスト教現実主義者にさえ当てはまる。われわれの理想がどんなに高くなっても、われわれが達成できる最善は、状況に見合った正義への不十分な接近である。われわれは、完全な正義や永久の解決を提供したと主張するやいなや、その正義への接近によって達成してきた善を何であれ台無しにし始めるのである。

政治的知恵は、いつも私利私欲によってゆがめられるので、正義への接近は、一方の側だけの理想からよりも、おおよそ同等の対抗勢力のぶつかり合いから生じる時、より良いものになる。ニーバーは、冷戦中、熱心な反共主義者であったが、何よりもまずキリスト教現実主義者であった。ニーバーは、ソ連との超大国としての対立関係にある時でさえ、西欧民主主義が、別の同等の勢力によって反対され、制限されることが良いことであると信じていた。それどころか、ニーバーは、民主主義にとって、そのような類の反対を受けることは特に重要かもしれないと考えていた。民主主義には、全体主義という対抗勢力にはない柔軟性がある。民主主義は、指導者を変えることもできるし、方向を変えることもできるし、経験から学ぶこともできる。しかし、民主主義の目的が反対されず、その徳が問題視されないとき、民主主義はその民主的な強みを失いがちである。対抗勢力のいない強大な民主主義は、危険にさらされている民主主義である。民主主義は、その徳と同様に、その力を過大評価しがちなのである。

もちろん、グローバルな安定の源としての超大国の対立関係は過去のものである。歴史上の緊張した時期であったに

もかかわらず、また、超大国が対立関係にあることによって平和が保たれたとはいえ、その対立関係はきわめて深刻な問題であった。それゆえ、超大国の対立状態がすぐに戻ることを願う理由はないし、また戻る気配もない。しかし、超大国の対立状態へのニーバーの支持の背後にある道徳的洞察には、永続する妥当性があるように思える。すなわち、われわれは、均衡を保つ力によって、正義への接近を求めるということである。今日における相違は、われわれが求めている正義に近いものを創り出すために、まさに、どの力とどの力の均衡をとらねばならないのかということに関係するのである。

ウィーン会議から冷戦の終わりまでの優に一世紀以上の間、最も重要な均衡は、特に国家間の力の均衡であった。特に、帝国的野望を持った最も強力な国家間の力の均衡であった。［ところが］最も重要な新しい現実のひとつは、世界秩序における国家の役割の重大な変化である。われわれは、冷戦の終結前に始まり、その後グローバルな経済とさまざまな文化的結合とともに加速する、グローバルな現実を形作る国家の力が相対的に衰えるのを見てきたのである。

これは、まさに相対的な衰えである。グローバルな経済と文化は、政府の役割が橋の通行料金を収集することや駐車券を発行することに矮小化されるような世界を生み出そうとはしていない。国家は今なおきわめて強大である。しかし、国家は、第二次世界大戦が終わる頃に持っていた、グローバルな諸現実を決定づける独自の能力を持っていないし、そうした能力を取り戻す気配もない。多国籍企業は、多国籍企業と政府がビジネスをする場では、しばしば、政府よりもっと効果的なやり方で交易の条件を決める。中央に偏らない伝達方法により、アイディアや文化や一時的流行でさえも、警察が規制することができる速さよりもはるかに速い速度で世界を席巻する。企業家の利益も労働の搾取も、どちらも制御するのが以前より困難になっている。どちらももはや、空間的隔たりよって効果的に制限されないからである。

これらすべては、冷戦終結がもたらした、予想外の結果である。二〇世紀後半のほとんどの間、世界秩序を明確に定

めた超大国の対立を除けば、対立しているブロックのすべてのシステムはそれぞれ、イデオロギーよりも主として経済関係において規定された自己利益を追求する集合国家へと移行する。超大国の国家よりもグローバルな企業が、求められるべき重要な同盟国になる。ところが一方、抑圧されたナショナリズム、人種的な憎しみ、宗教的対立といったことが、国内の治安に対する主たる脅威として立ち現れる。冷戦終結後のある政策立案者たちにとって、冷戦終結後の新しい現実に対するアメリカの支配は、単純な数式のように思えた。すなわち、二つの超大国が存在していて、その一つが除かれるならば、残るは一つの超大国である、ということである。しかし、現実主義者たちは、ものごとの論理がそのような単純な数式には従わないことを、われわれに思い起こさせるであろう。ますます窮地に追い込まれた国家の政府は、地域的な脅威、国内不安、経済競争に、かつてなかった方法で注意を払わなければならない。二つの超大国が、かつて共に連帯して要求した尊敬や注意を、一つの超大国に与えることはできない。二つの超大国のうちの一つを除いてみよ。そうすると、一つの超大国が残るのではなく、何も残らないのである。

## 新しい超大国

したがって、今日の世界にとって、キリスト教現実主義の最初の教訓は、高慢がつねに、現代諸国家の内部でまた諸国家を横断して展開しているもうひとつの権力形態を、いかに、政治的現実主義者たちにさえ見えなくしてしまうか、ということである。われわれは、適切に現実主義的で、国家の諸行為を自己利益という最も単純な言葉に縮約してきたと考える時でさえ、自分たちが見ていない間に出来事を形成する力を獲得するような力と利益の中心がほかにも存在することによって、驚かされがちである。超大国の対立関係の力学を修得し、まだどうなるかわからない将来の平和を維

持するために力の均衡を確立したと考えたその矢先に、われわれは、突然、超大国が存在しない世界にいることに気づかされる。今や、宗教的、文化的、経済的な諸機関は、さまざまな事象を制御するために、それぞれ独自のかたちを働かせ始めているのである。国家それ自体の境界内部における事象であっても、一つの国家でそれを制御できる国家はない。たとえ、他の国家よりも強力な一つの国家が存在するとしても、その国家がそうした他の国家の権力中枢の条件を定めることはできない。

冷戦時代の終結時、ただ一つの超大国が残されたゆえに、今や複数の超大国は存在しない。ただし、「超大国」を、軍事的、外交的、経済的な力を、地球の広大な地域で行使する力を持つ国家という通常の意味で受け止めるならば、である。言い換えれば、新しい複数の超大国が存在するとしたら、それらは、国家ではなく、機関や制度の名を冠したものであろう。ビジネス、文化、そして少々驚くべきことに宗教は、今や、長く続いてはいるがより制限された政治体制の力と並んで考慮されることを要求しているのである。

強力な国家に分断された世界に慣れた単純な政治的現実主義にとって、それは、超大国がない状態は無政府状態に見える。しかしながら、キリスト教現実主義は、問題についてより長い見方をとる。つまり、ラインホールド・ニーバーだけでなく、アウグスティヌスやルターにまで遡って考える。主権国家自体、かつては世界の政治における新しいものであり、平和の道具として始まったことを、キリスト教現実主義は覚えている。西ヨーロッパと日本のいずれにおいても、近代国家は、より小さな地域の権力中枢を支配し、秩序の枠組みを創り、そこにおいて近代社会が成長しうる方法として現れた。プロテスタント宗教改革に続く戦争を生き抜いたヨーロッパ人や、明治維新に先立つ無秩序を生き抜いた日本人にとって、最初は平和だけで十分であった。ちょうど、アフガニスタンやイラクの大部分の人にとって、平和であれば十分であるように。ただし、もしかれらが今日、そのような状態に到達できればということなのだが。しかしながら、いったん国家が平和と安全を提供すると、他のことがすべて可能になった。成功した近代国家は、平和と秩序

の場所になっただけではなかった。それは、ビジネスと文化と宗教の機関が、以前に誰も想像しなかった仕方で隆盛を極める場所になったのである。

しかしながら、超大国時代が終わった時に起こったのは次のような事態であった。すなわち、成功した現代国家は、他の国家とだけでなく、あるいは主として他の国家とだけでなく、成功した現代国家が最近までしっかり統制していた競合するさまざまな勢力とも戦わなければならない、という事態である。そうした勢力は、ビジネスであり、宗教であり、文化であった。特に今日、国家の力に対抗する「強力な力（スーパーパワー）」はビジネスと宗教である。

ビジネスの世界には、グローバルな統一性が見られる。市場の仕組みがそれを強化している。市場は、近代精神によって解き放たれた強力な力である。それは、封建制の統制経済秩序と宗教の禁止という制約を破壊し、市場がもたらす報いと罰を市場自体に押し付けた。問題は、当然のことながら、市場自体の工夫に任された市場が、そこで売るものがない者たちのことにまで関心を払わないことである。市場は、将来の必要などを考慮せず、環境のような所有者なき資源を搾取しがちである。市場は、資源をそれが生み出された場所からはるかに離れた場所に移動させることができる高度に可動的な形態の中で、資本や利益を産み出す。そうした市場の拡大が与える影響の大部分は、二〇世紀半ばまでは、成功した現代国家がその内に持つある程度の統制の下で抑制されていた。しかし、経済のグローバル化は、同じ問題を、以前より大きな規模で再び引き起こした。そうした国家の政府が、新たな条件の下で前と同じ成功を収めることができるかどうかは、不透明である。

対照的に、宗教は、おそらく、現代の世俗国家によって弱められてきた力である。しかしながら、明らかなのは、個人の生活における統一性や秩序や規律などの必要が、物質的な豊かさや政治的な自由によって減少することはないということである。宗教は、最も発展した社会においても個人を動かす強力な原動力であることに変わりはない。同様に、宗教が提供するアイデンティティや尊厳の感覚は、自由を奪われた人々や周辺に追いやられた人々が、西欧流の消費者

中心の生活様式を追い求めて裕福な人々の仲間入りをするという可能性よりも、ずっと期待できるものであるように見える。その結果、原理主義的運動や反体制文化的宗教共同体が、最も進歩した社会でも最も遅れている社会でも、急速な勢いで成長しているのである。

これは、現代の西欧社会において世俗化を長い間経験してきたわれわれがそれによって予測したものではなかった。また、歴史的予測のこの混乱が、われわれの経験の地平を超えたどこからか生じてくる巨大な脅威の兆候に違いないと考える傾向もあった。真摯な学者やテレビのニュース記者たちは、一様に「文明の衝突」ということを言い始めた。民主的で開放的な市場志向の世界は、突然、イスラム原理主義や他の種類の原理主義に基づいた、伝統主義的で権威主義的な世界観によって挑戦を受けることになった。「文明の衝突」について語る人々は、これほど大きな文化的、歴史的な隔たりを超えて交渉をする方法はないと言う。これらは、この惑星を支配するために、互いに戦わなければならない運命を背負った二つの異なる文明なのである。

しかし、私には、「文明の衝突」というモデルが正しいとは思えない。ここで言う「文明」はいずれも、現代世界において、ある程度の期間存在し続けてきた。それどころか、二つの文明は、安価で豊富な化石燃料で走り続ける現代のグローバルな文明を協力しあって作り上げてきたのである。これは「文明の衝突」ではありえない。なぜなら、ひとたび、ある文化が、文化人類学者たちによって研究されている地域共同体のレベルを超えた時、われわれすべてが住んでいる文明が、存在する唯一の文明となるからである。

むしろわれわれが抱えているのは、政治の力が急速に低下したことによって生じた空隙を、この一つの現代文明の内部にある二つのシステムのどちらが埋めるかという競争である。ビジネスと宗教は、それぞれ、共同体を分裂させ政党を対立させている論争に対する包括的な解決策を主張する。ビジネスは、市場が資源を最も適切に配分でき、長い目で見て私たちの富を増大させるために最も多くのことができる、と強く主張する。したがって、われわれは誰もが、個々

の好みがどうであれ、市場の判断に基づいて生きることに同意すべきなのである。宗教には、少なくともある型の宗教には、文化の変化や道徳の不確実性を超越する生き方があると主張する。したがって、われわれは誰もが、個々の好みがどうであれ、神の決定に基づいて生きることに同意すべきなのである。イスラム教であれその他の宗教であれ、原理主義は、信仰者の生活が市場の力やその欲望を中心に形成されるべきではないと主張する。同様に、世界規模のビジネスは、宗教は自由を阻むものであってはならないと主張する。その自由とは特に、ビジネスが売るべきものを人々が要求する自由とそれを売るビジネスの自由を意味する。

これら二つのシステムは、現代国家の保護の下に、現代世界の内部で形作られてきた。双方の指導者たちは現代世界の事情をよく心得ており、きわめて熾烈な競争を繰り広げている。われわれ全員も関わっているその競争とは、われわれの目前で今始まっている新しい世界秩序の中で、現代国家に代わるべき指導力となるのがビジネスと宗教のいずれのシステムかを決める競争である。

## 新たな種類の力の均衡

キリスト教現実主義は、異なる種類の秩序を提唱する。われわれは誰でも、政府、ビジネス、宗教の間の競争と関わってはいるが、この三者のいずれか一つに現代生活のすべての条件を決定させてしまうような選択をすべきではないであろう。それどころか、人間の自由の将来は、この三者の競争を継続していくことにかかっていると言えよう。そして、超大国間の競争がその時代において驚くべき度合いの秩序をわれわれに与えてくれたように、この新しい種類の競争を維持することこそ、自由と同様に、秩序を得るための鍵となるであろう。

この新しい世界の現実の理解において、秩序は、自らの領土で発生するすべての事に対して最終決定権を持つ主権政府によって維持されるのではない。秩序は、抑制と均衡のシステムと、政治、ビジネス、宗教のそれぞれが自らの利益を維持するに十分な力を持ち、その一方で三者のいずれもが究極の支配力を持たないという拮抗する力によって維持されるのである。これは、力の均衡がなお政府間で維持されなければならないという点において、古い世界秩序に似ている。競合する国家間の力の均衡は、保たれなければならないが、過去に比べればあまり重要ではなくなるであろう。フランスとドイツが、前世紀にそうであったように次世紀においても互いに戦争を始める気配はほとんどない。しかしそれは、両国が一九一四年以前に達成していたよりさらに良い、あるいはさらに永続的な力の均衡状態を実現したからではない。フランスとドイツが互いに戦争を始めることを考えないのは、いずれの政府もビジネスのことを考えているからである。今日のヨーロッパにおける各政府の政治的命運は、グローバルな経済の世界において、国益をいかにうまく守れるかどうかにかかっている。それは、かつて各国政府の政治的命運が、自国の海軍力をいかに維持できるかにかかっていたのと同様である。

この新たに出現したグローバルな秩序において、政府は、依然として、領土内の平和と安全を守るという本質的な役割を担っている。しかし、他国に対して力を動員するという機能は、ますます少なくなっていくであろう。安全保障が今政府に求めることは、欧州人権裁判所や国際刑事裁判所といった司法フォーラムや、国際通貨基金や欧州中央銀行といった経済フォーラムのようなグローバルなフォーラムにおいて、国民の権利と利益を守る代弁者として行動することである。

その結果、このようなすべての動向は、グローバルな秩序が、以前は国家間の力の均衡に依存していたのと同様に、現在では宗教、ビジネス、政治の間の力の均衡に依存していることを示している。キリスト教現実主義は、こうした種類の秩序が、グローバルな規模の道徳秩序に達すると期待できる、限りなく最善に近いものでもあることを示唆してい

る。そうであるとすれば、キリスト教現実主義者の実際的な課題とは、いかなる状況であれ、政治、ビジネス、宗教、文化の基礎となるすべての機関が、健全で力強くあると同時に、そのいずれかが他を支配するほど強力にならないように、いつも確認していることである。われわれはこの考え方を、主として国家が創出しうる平和と秩序に着目する旧来のキリスト教現実主義と区別するために、「多元的キリスト教現実主義」と呼ぶことができるかもしれない。

それどころか、多元的キリスト教現実主義は、この新しく現れたグローバルな秩序における国家の役割についてまったく異なる問題も提起する。ラインホールド・ニーバーのようなこれまでのキリスト教現実主義者たちは、現代国家がかれらの時代のグローバルな体制においてひときわ最も強力な政治的現実だと信じていた。そしてかれらは、それがあまりにも強大になりすぎて、民主政治においてすら過大な影響力を発揮し、人間の自由に脅威を与えるのではないかということだけを心配していた。その結果、かれらは全体主義に強く反対したばかりでなく、同じ西側民主国家の市民たちに対し、かれらの政府ですらおのれの正義のために過大な要求を突きつけ、ほしいままに権力を振るうことがあるのだと注意を喚起することも厭わなかった。もちろんそれは正しかったし、われわれは同じ警告をこれからも発し続けなければならない。

しかし新たに台頭したグローバルな秩序に照らしてみると、われわれは、二〇世紀のキリスト教現実主義者たちにはほとんど考えられなかったような新しい問いを提起していくべきである。宗教と経済がグローバルな力として大きくなっているとすれば、今、現代国家というものが、新しい世界秩序の中でその機能を十分果たしうるほど強力であるかどうかを問わなければなるまい。ビジネスが国境を越え、宗教が軍事を拒み、文化がインターネットによって光速で移動する世界にあって、現代国家は依然として安全を確保し、すべての社会を団結させて、正義に近いものを実現できるだろうか。資源や人々がビジネスによって搾取されている地域にある国家の脆弱性と、宗教運動が戦争する能力を持つ地域における統治の崩壊は、新しいグローバルな秩序が依存するこの新しい力の均衡が、アジア、北米、西ヨーロッパ

の先進民主主義国家で考えられているよりもずっと脆いことを示す警戒標識のようなものである。この新しい世界秩序は古い世界秩序に比べると、相互にいっそう緊密につながり依存しているために、どこかが不安定になると至る所で構造上の危機が生じる。このように、新しい現実は、キリスト教現実主義者に、主権と国家権力の擁護者という予期せぬ役割を与える。しかし、過去数十年間、アフガニスタンやレバノンの政府がもっと強力で、宗教運動がもっと下火だったとしたら、人々はもっと良い暮らしができただろうということを、だれが否定できるだろうか。あるいは、発展途上国の市民は、かれらの政府が労働法と環境法を作り施行する能力があったとしたら、もっと良い生活と将来を期待できたということを、だれが否定できるだろうか。

## 新しいキリスト教現実主義の原理

このように多元的キリスト教現実主義は、イデオロギー的政治と冷戦時の対立が顕著だった時代のキリスト教現実主義とは異なる期待を担い、異なる政策を支持する。しかしこうした新しい立場は、政治的生に関する次のような同じ神学的理解から出ている。すなわち、正義と秩序のあらゆるシステムに限界を見出し、いかなる力も神と混同しないことが政治的な英知であるとする理解である。さらに、この混同の危険が、われわれが密接に関わる場所で最も大きくなるとも警告する。ラインホールド・ニーバーのキリスト教現実主義は、国家、政府、政治的指導者に対する偶像礼拝を戒めている。今、われわれは、この警告には、会社と文化、企業の救済者と独占的宗教に対する偶像礼拝も含まれると付け加えなければならない。

新しい現実は、現在では以前ほど永続性がないかもしれない。国家間の力の均衡の上に成り立っていた国際秩序は、

ウィーン会議から冷戦終結までの二世紀弱しか続かなかった。ニーバーのキリスト教現実主義的考察を生じさせた、超大国間のイデオロギー抗争に基づく力の均衡は、四十年ほど続いただけであった。一部の人々は、経済および文化のグローバリゼーションの風潮はさらに短命だと見ている。しかし今日の変化は、歴史を深く遡り、ルネサンスと宗教改革以来広く行き渡ってきた政治的現実についての諸前提を無にするような変化であるように見える。もし変化がそれほど深くにまで及ぶものだとしたら、この新しい現実もまた長く続くかもしれない。しかしながら、この変化がどのくらい続くかは、われわれが、この新しい経験を十分よく理解し、それを、初期世代のキリスト教現実主義者たちが不確実な時代の国際秩序の礎と見なした永続的な政治的現実と関連づけられるかどうかにかかっている。

前世代のキリスト教現実主義者たちが、力の均衡を、グローバルな秩序と呼ぶことが許されるほどそれに近いものとして認めたように、この種の多元的な社会的均衡は、ほとんど到達しそうな距離にあるグローバルな規模の道徳秩序である。そこでは、平和をもたらすための実際的な課題は、どのような状況であれ、政治、ビジネス、宗教、文化の根幹をなすすべての制度や機関が健全かつ力強い状態であるように配慮しながら、同時にこれらのいずれか一者が他のすべてに対して条件を押しつけるほど強大にならないように、よく注意することである。異なる国家や異なるイデオロギー間の均衡を保つだけでなく、まったく違う種類の力の均衡も保たなければならない世界における平和とは、このようなものである。

（二〇一三年六月一一日、聖学院大学）

## 注

（1）Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and the Children of Darkness* (New York: Scribner's, 1944), 17.［武田清子訳『光の子と闇の子』聖学院大学出版会、一九九四年、二六頁。］